

# 報告ダイジェスト

- ・夏を満喫!!～プチバカンス 2024～ (報告1)
- ・Sri Lanka 訪問記 (報告2)
- ・新理事紹介 (報告3) /新職員紹介 (報告4)
- ・玉井所長のイタリア訪問記⑤ (報告5)
- ・研修報告 (報告6) /退職のご挨拶 (報告7)

## 報告1 夏を満喫!!～プチバカンス 2024～

7月6日～7日にかけてプチバカンス2024を実施しました。今回のプチバカンスでは、海へ行こうということで、夏の開催となりました。たくさんの利用者の方からご応募いただき、総勢38名で千葉県鴨川市の宿泊所と同じく千葉県にあるマザー牧場へ行きました。宿泊所は、太平洋が一望できる鴨川市青少年自然の家でお世話になりました。

### ●晴天の中、バスで出発!!

プチバカンス当日、朝8時にJR恵比寿駅に集合。天候にも恵まれて、班ごとにバスまで移動し出発しました。2日間の旅行ということで、みんな楽しそうにしていました。道中のバスでは、お互いに今回の旅行で楽しみにしていることを話したり、ゲームをしたりして楽しみました。特にビンゴゲームでは、みんなで盛り上がりました。

### ●鴨川青少年自然の家に到着

途中、海ほたるでの休憩をはさんで、予定通りに宿へ到着。入所式を行ない、宿の方から施設についての利用方法やシーツの敷き方のレクチャーを受けました。みんな真剣に話を聞いていました。お昼ご飯は、宿の食堂を借りて、各自で持ってきたお弁当を食べました。

### ●コースに分かれて、体験活動

最初のプログラムは、屋外コースと屋内コ

ースに分かれての体験活動を行ないました。

屋外コースでは、宿の近くにある太海フラワー磯釣りセンターへ行き、魚釣りに挑戦しました。暑い中でしたが、魚釣りの楽しさと難しさを体験しました。

屋内コースは、創作活動で勾玉づくりを行ないました。宿の方から教えてもらいながら、自分たちオリジナルの勾玉を作りました。石を削ったり、磨いたりするのは大変でしたが、ひとりひとり個性的な勾玉が完成して、満足そうでした。



【勾玉づくりをしている様子】

### ●夜プログラムまで、しばらく休憩

昼のプログラムが終わると、各部屋に戻って、布団の準備をしました。率先してリネンコーナーへシーツを取りに行ってくれる人がいて、みんなで協力して布団の準備ができたので、スムーズに完了しました。その後、旅行の期間中が七夕ということで、各々の願い事を短冊に書いたりゲームやおしゃべりをしたりして、夕食までゆっくり部屋でくつろぎました。今回の宿泊部屋は大部屋ということもあり、班の垣根がなく、みんなとわいわ

い楽しんで交流をすることができました。

### ●夕食は、みんなで野外炊飯

1日目の夕食はバーベキューで、班ごとに分かれて、白米とお肉、野菜を食べました。自分たちでまき割りから、火おこし、炊飯の準備を行ないました。火おこしは、去年のプチバカンスで経験している人もいましたが、どの班も苦戦していました。頑張った分、どの班もおいしいごはんを食べることができました。

### ●夏の風物詩、花火大会

おなかいっぱいごはんを食べて、日が沈んできた頃から、花火大会を行ないました。たくさん手持ち花火をしたり、ダンスをしたりしてみんなで楽しみました。手持ち花火は、子どもの頃以来久しぶりにする人も多くいて、懐かし気持ちで、夏の夜を味わいました。

### ●持ち寄ったお菓子が2次会

花火大会の後には、お風呂へ入り、食堂で2次会を開催しました。ご寄付いただいたお菓子を含めみんなで持ち寄ったお菓子を食べながら、ゲームやおしゃべりをして、交流を深めました。またお昼に短冊に書いた七夕の願い事を発表しました。

### ●持ち寄ったお菓子が2次会

2日目の朝は、6時に起床。希望者でラジオ体操を行ないました。その後、みんなで出発の準備と部屋の掃除を行ないました。布団の片づけだけでなく、自分たちが利用した部屋の掃き掃除、廊下やトイレの清掃を協力して行ないました。それから朝ごはんを食べて、宿の方へお礼のご挨拶をして、出発しました。

### ●マザー牧場で動物たちと交流

2日目のメインプログラムは、マザー牧場。到着してすぐに、各国の羊が登場する羊ショーを鑑賞して、お昼ご飯にハンバーグを

食べました。その後、班ごとに分かれて、広大な牧場を散策して、牧場の自然や動物との交流を楽しみました。羊や馬、ヤギやアヒル、カピバラなどたくさんの動物たちと触れ合い、都会では味わえない充実した時間を送ることができました。



【マザー牧場での様子】

### ●マザー牧場でお土産を購入して、東京へ

楽しい2日間の旅行ももうすぐ終了。帰りのバスレクでは、毎年恒例のカラオケ大会を行ないました。例年通り歌いたい人がたくさんいて、楽しい歌声を披露してくれました。旅の最後の時間を各々、歌を聴きながらゆったりしたりお互いに旅行での思い出を話したりしながら過ごしました。

### ●最後に、実行委員を代表してご挨拶

今回のプチバカンスは、夏の開催ということで、暑い中でしたが、大きな事故もなく無事に終えることができました。今回の開催にあたりボランティアスタッフをはじめ、たくさんの方々のご協力、ご支援をいただきました。皆様のおかげで楽しい夏の思い出を作ることが出来ました。実行委員を代表して感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

また、今年度は宿泊行事として、冬に雪あそび合宿を久々に再開しようと計画しています。是非そちらにもご参加とご協力をいただければ幸いです。

(プチバカンス実行委員長 竹内翔悟)

## 報告2

### スリランカ出張報告

### ～スリランカで必要とされるグループホーム～

7月7日から1週間、谷口元ばれっと代表とボランティアの栗原さんが、スリランカ「サハン・セバナ」のグループホーム設立に向け、そのニーズの調査を目的に、現地視察に行きつて参りました。サハン・セバナは、2009年に『スリランカ Palette』(以下 Palette) が閉鎖される際、現地大手ビスケット会社マンチー(CBL)の特例子会社として、障がいのあるメンバーやスタッフ全員の雇用を引き受けていただき現在に至っています。Paletteの時代から働いているメンバーの高齢化に伴い、スタッフやメンバー、親からの切実な声をお伝えします。

(PIJ代表 相馬宏昭)

#### ●サハン・セバナの将来と従業員の福祉

谷口さんの来訪は、サハン・セバナが15周年を迎えるにあたり、これまでの歩みを振り返る良い機会となりました。これまで私たちは、経営的に安定した強固な財政基盤を築いてきました。しかし、今後を見据える中、新たな課題が浮かび上がってきました。共に歩んできた障がいのあるメンバーたちが定年の時期にきています。彼らは、高齢の親と共に、一般の人々とは異なる課題に直面しています。私たちは、彼らの福祉を確保するよう努めていますが、現行の制度では対応することに限界があることを認識しています。

彼等に最も差し迫った問題の一つは、適切な住居、支援、そして医療が不足していることです。私たちは、スリランカにおける様々な支援サービスを調査しましたが、残念ながら今のところ有効な解決策を見つけることができていません。そこで、ばれっとからグループホームの概念を学ぶことにしました。このアプローチにより、私たちもメンバーのために住まいの選択肢を作り出すことがで

きるという夢が芽生えました。グループホームは、彼等が尊厳を持って生活し、必要な支援を受け、自立生活に効果的に対処できる場所を提供するものです。しかしこの夢を実現するには、学びと情報収集をする必要があります。そのためには、スリランカ政府や私たちのビジョンと共感できる他の関係機関との協働が必要です。グループホームを設立することは夢のある一歩だと信じています。それは価値のあることであり、皆で力を合わせれば実現できると確信しています。

ばれっととのオンライン会議や谷口さんとの会談を通じて、私たちのモチベーションと自信は非常に前向きになりました。私の人生にとって大きな糧となり、社会的責任を果たせる幸せな人間になれる思いでいます。

(サハン・セバナ プロジェクトマネージャー  
アヌーシャ・フェルナンド)

#### ●グループホームの実現

私は、Paletteのスタッフの時代から数えると22年になります。親の高齢化に伴い様々な病気に苦しみ亡くなるケースが増えてきました。その結果、兄弟から十分なサポートを受けられずにいるメンバーもいます。この問題に対処するため政府機関やその他の関連団体と協議を行なってきました。しかし福祉省職員と行なってきた会議を振り返ると、残念ながら未だ解決策を見つけられずにいます。

高齢化が進むメンバーの将来についての懸念が高まる中、ばれっととのオンラインでのディスカッションを通じ、グループホームのコンセプトについて詳しく説明を受け、私たちの理解が深まりました。谷口さんは、グループホームコンセプトの重要性と、それを維持し続けるために必要なプロセス、親元を離れての自立生活というものの認識と入居者の

方への支援の必要性を強調しました。そのために、アヌーシャさんと私が日本でグループホームについて学ぶ機会を作ることを提案しました。私は、スリランカでこのプロジェクトをスタートする前に、学びと準備が不可欠であると思っています。この目標を達成するためには、ばれっとからの全面的なサポートと私たちへの教育が必要です。

私の夢は、サハン・セバナのもとでメンバーたちが、自由、調和、そして幸福を感じながら、地域の人々と同じように生活できるグループホームを実現することです。グループホームの実現の下、サハン・セバナのメンバーにとって安心な未来が提供できることを願っています。

（所長 チャミラ・グナワルダナ）

### ●夢は実現させるもの

私は Palette の時代から数えると 20 年現場スタッフとして働いています。私は多くのメンバーの親御さんと話す機会がありました。彼らは自分の子供たちの将来、特に年を重ねるとともに直面する様々な健康問題に不安を抱えています。兄弟が障がいのある家族の世話を引き受けたがらない様子を見るのは、非常に心が痛むことです。親が亡くなった後、彼らが放置され、孤独になるのではないかという恐れが常にあります。

人は誰もがそうであるように、仲間とのつながり、安心、そして愛を必要とし、誰にも負担をかけることなく、幸せで自立した生活を送る権利があります。しかし、今のスリランカ社会では達成不可能な夢のように感じられることが多いのです。

グループホームについて知ったとき、私は新たな希望と喜びを感じました。このコンセプトがメンバーにとってより良い解決策を提供できると心から信じています。この夢を実現できれば、彼らにとっては残りの人生を

幸せに過ごせる住まい、ケア、そして安らぎの場所を提供できることでしょう。

このコンセプトがサハン・セバナで実現できるのを夢見ており、全力でサポートしていきたいと考えています。この可能性を私たちにもたらしにくださった谷口さん、相馬さん、そしてばれっとに感謝いたします。

（スタッフ プラミラ・シルバ）

### ●メンバーの声

将来的にサハン・セバナのメンバーのためにグループホームを設けるという考えは、非常に歓迎される動きです。私たちは、親が亡くなった後、兄弟や他の親戚に負担をかけたくないですし、自立して生活したいと考えています。私たちも、親切で思いやりのあるスタッフがいる安全な環境を期待しています。サハン・セバナの将来の取り組みに対して成功を祈っています。（R.K. プラカッシュ）

### ●親の願い

Palette は、スリランカで初めて障がいのある方々に雇用機会を提供し、そのコンセプトをサハン・セバナに継承しています。この取り組みは、彼らの働く力を伸ばし、収入を増やし、自信を築き、当たり前として生きることで、彼らの人生を豊かにしています。そして今、グループホームコンセプトの導入により、さらに一步を踏み出しました。この取り組みにより、彼らは老後を仲間と共に一つの屋根の下で過ごすことができ、高齢の親にとっても本人にとっても大きな安心感をもたらします。友人と共に暮らすことで、孤立を避け、精神的にも大きなメリットがあると考えています。

ばれっととサハン・セバナに対し心から応援しています。このプロジェクトの成功を祈ると共に、グループホームがスリランカで実現することを願っています。

（メンバー マンジュラ母）

よろしくお願いします！！

## 報告4 新しい理事からメッセージです。



今年5月の総会にて役員改選が行なわれ、下記の方々が新たに理事として選出されました。任期は2026年の総会までとなります。改めてメッセージとともにご紹介します。課題山積のぱれっとですが、力を合わせて乗り越えていきたいと思えます。なお、今回の総会をもって、ぱれっと親の会 田代真紀子さん、会社員 金子正和さんが任期満了で退任となりました。長年のご尽力に感謝申し上げます。ありがとうございました。（事務局長 南山達郎）

この度、特定非営利法人ぱれっとの理事に就任しました向井直子と申します。息子がおかし屋ぱれっとに勤めて4年目となります。息子の特性が分かり地域の障害者をめぐる環境、大人になってからの生活などに眼を向けたときに出会ったのが「ぱれっと」でした。人としての尊厳を大事にして共にすすんでいる姿に勇気ももらってきました。よりよい社会とはどういったことなのかを考え、社会に問うていければ幸いです。微力ながら理事として関わり私自身も成長していきたいと考えています。よろしくお願いいたします。（ぱれっと親の会 向井直子）

5月の総会でご承認をいただき、このたび理事を拝命しました蔭山と申します。私が「ぱれっと」と出会ったのは、おかし屋ぱれっとにお勤めの田代さんがデザイナーを務めたシブヤフォント（ヒーローフォント）を弊社ロゴマークに使用させていただいたことがきっかけでした。その後も、田代さんに弊社のイメージ絵画を描いていただくなど、交流をさせていただきました。

私はこれまでに3回の脳梗塞を経験し、現在も毎月の定期入院が必要で、病と共存しています。そのような身ではありますが、より良い未来を皆さまと共に作っていけるよう精進して参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

（株式会社 TrustWalk 代表取締役 蔭山 幸司）

2014年春にぱれっとに入職して10年がたちました。この10年の間に、たくさんの楽しいことや喜びを皆さんと共有して来ましたが、もちろん困難もたくさん乗り越えてきましたが、これからの1年、5年、10年…は更なる困難が待ち構えているでしょう。社会を見渡すと「SDGs」や「多様性理解」が声高に叫ばれるようになったものの、表面だけが取り繕われ実のところ「分断」が加速している気がするのはいり過ぎでしょうか。理事の中でも現場に一番近い立場として、ぱれっとに関わる人達同士が「協調」していけるよう努めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。（おかし屋ぱれっと・工房ぱれっと所長 玉井七恵）

## 報告4

## 新しい仲間を紹介します



はじめまして！山元絵里（やまもと・えり）です！



6月16日におかし屋ぱれっとに入職しました。以前は回復期リハビリテーション病院で介護福祉士をしていました。お菓子作りは初めてなので今はまだ、職員やメンバーにひとつひとつ教えてもらっています。子どもの頃に「大きくなったらケーキ屋さんになりたいです」と言っていた夢が叶いました。毎日たくさんのクッキーやケーキに囲まれて楽しい日々を過ごしています。普段はスポーツを見るのもするのも好きなので、野球を観たり、ランニングやウォーキングをしています。マラソンの大会でいろいろな場所を訪れて観光できるのも楽しみのひとつになっています。これから、よろしくお願ひします。

はじめまして 平郡香絵（ひらごおり・かえ）です！



7月1日におかし屋ぱれっとに入職しました。前職でも、就労継続支援B型事業所で支援員として働いておりました。まだまだ分からない事ばかりで、皆さんに教えてもらいながらの日々ですが、毎日楽しくお仕事をさせていただいております。早く現場にも慣れ、メンバーさん一人ひとりに寄り添いながら、適切な支援が出来るよう努めてまいります。最近のマイブームは、休みの日に近くの公園に行って景色を眺めたり、ドッグランで遊んでいる犬を見てのんびりすることです。これからよろしくお願ひいたします。

# 報告5 玉井所長の イタリア訪問記⑤～カルトゥージア出版～

CARTHUSIA

昨年11月に訪れたイタリア視察の中から、今回は絵本専門の出版社「カルトゥージア出版」を紹介します。

## ●1987年、女性だけでスタート（注<sup>1</sup>）

ミラノ市の中心部から数駅、美しい石造りのアパートが立ち並ぶ中の一室にカルトゥージア出版のオフィスがあります。この出版社は、女性らしい細やかな心づかいが細部まで宿ったオリジナル作品だけを、これまでに400冊以上出版してきました。「美しい物しか作らないわよ」と話す、創業者で編集長のパトリツィアさんは真っ赤なスカーフがよく似合うパワフルな女性です。「“本”は世界を見る目を養うのにごく大事。様々な問題や他の国の人の事を理解するためにもね。」「自分らしさをそれぞれ理解してお互いに大事にすることが必要。私たちはみな平等だけど、同じではないでしょう。」と話す言葉からは、これまでの視察先と同様に、イタリアは移民など多様な人々が暮らすことが当たり前の社会であり、そこから生まれる課題に関与することが当然の役目だと考えていることが伺えました。

## ●困難な状況におかれた子どもたちと作る本

特にユニークな過程を経て作られているのが、問題に直面する子どもたちのケアを目的に作られた絵本のシリーズです。このシリーズ最初の本は、ミラノ国立がん研究所に入院する放射線治療が必要な子どもたちのために作られました。治療中身動きが取れないよう長時間に渡りメッシュで体が固定されたり、視界を遮断されたりすることは子どもにとっては非常に怖いことでした。そのため医者とは体が未熟で生育段階にある彼らに麻酔を投与することは本来望ましくないと考えていましたが、麻酔で眠らせる以外の方法がありませんでした。

そこで当事者である子どもの声を聞くために模索して生まれたのが「フォーカス・グループ」と呼ばれるチーム（病気である子

も・その親・心理学者・ソーシャルワーカー・編集者・作家・画家ら）でした。おやつやピザを食べながら、子どもがどんな経験をして何を感じているのか5、6回のワークショップを通じて聞き取り、絵本のストーリー案を作っていきます。その案を学校へ持っていき子どもたちに読み聞かせを行ない、子どもたちの反応を見ることでストーリーの細部や挿絵のプランを固めていきます。

そして出来上がったのが、尻尾を失くしたネコが自分のしっぽを取り戻すために宇宙へ行き、勇敢なネコとして認められるお話です（原題『Il gatto che aveva perso la coda』、和訳『尻尾を失くした猫』（注<sup>2</sup>））。【宇宙船=放射線治療機】【ヘルメット=治療の際体を固定するメッシュ】のメタファー（隠喩）になっており、当事者がこの絵を見てストーリーを読めば、「これは私のことだな」と分かります。しかし楽しい普遍的な物語として誰もが読めるようにも作られています。直接的な表現をしない方が、子どもの心に深く入り込むことができるとパトリツィアさんは言います。

放射線治療に臨む子どもたちは、治療前にこの絵本を医者や親といっしょに繰り返し読む時間をとります。そうすることで、頭や体を固定されることへの恐怖心が“憧れの装備を身につけるんだ”という認識に変わるそうです。この絵本の誕生以来、がん研究所では子どもたちが麻酔を使わずに治療が受けられるようになりました。パトリツィアさんの「本は薬よ」という言葉には説得力があります（注<sup>3</sup>）。

「子どもが大好き」と語り、常に子どもや青少年を取り巻く社会課題に目を光らせていると語る彼女は、「絵本」を通じて子どもたちに数々の困難に立ち向かう勇気と知恵を与え続けていました。

（おかし屋ぱれっと・工房ぱれっと所長 玉井七恵）



今回の視察は、ローマ在住の多木陽介氏のアテンドと通訳により実現しました。心より感謝を申し上げます。

（注<sup>1</sup>）現在はスタッフ8名のうち男性が1名働いている。（注<sup>2</sup>）日本では未出版。未邦訳。（注<sup>3</sup>）同様の方法で、その他にも自閉スペクトラム症の子や、思春期で心が揺れ動く子を題材にしたもの等が作られている。

## 報告6 接遇・マナー研修受講報告

6月19日に接遇・マナー研修を受講しました。選ばれる施設・事業所をめざすということで、接遇マナーは理念や行動そのものなので行動で示すということがとても大切であると講師の方が初めに仰っていました。企業理念や行動指針と言った法人、組織における方向性も普段の言動や行動から示されているので改めて気を付けたいと思いました。そして、社会人としての最低限のマナー「挨拶」「身だしなみ」「表情」「態度」「言葉遣い」この5つのマナーをしっかりと普段から守っていきます。

研修の中で印象的だったのは「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があるように職員同士の礼儀や言葉遣いがとても重要だということです。このような環境と土壌を作ることで職場の雰囲気や働きやすさにもつながっていくので大切だと感じました。

職員一人ひとりが「組織の顔」であることを自覚し、今回の研修から学んだことを生かし当たり前のことを当たり前に出来るそんな社会人を目指し精進していきます。

(えびす・ぱれっとホーム 三上天河)

## 報告7 お疲れ様でした！！これからも応援しています！

※8月、下記の方々が退職されました。メッセージを紹介します。

長い間、大変お世話になりました。ぱれっととは、私が大学4年生の時にたまり場ぱれっとのボランティアを通して繋がりができ、縁があっておかし屋ぱれっとの職員になりました。ぱれっとに出会えたおかげで沢山の仲間を得ることができました。また、社会人としても支援員としても、そして人としても成長することができたように感じています。ぱれっとでの経験を糧に、これから第二の福祉人生を歩んでいきたいと思えます。今まで本当にありがとうございました。(おかし屋ぱれっと 松本亜沙子)

在職中は大変お世話になりました。障がいのあるお子さんに関わる機会が長くあり、大人になったらどのような社会に出て行くのか、大人の社会の勉強をしてみようと思い1番初めに会ったのがぱれっとでした。ぱれっとで働くメンバー(通所員)は本当に明るく一生懸命に働き何時も笑顔で沢山の仲間をくれました。忙しく大変な時も一緒に頑張りその日々の中で笑い合うことも沢山出来ました。海外研修という貴重な経験もさせていただき感謝しています。沢山の出会いもありこれからの私の財産にもなりました。いただいた沢山の経験をこれから私の歩んでいく道に活かせるように頑張っていきます。本当にありがとうございました。(工房ぱれっと 宮越三映子)

8月31日をもって退職することになりました。3年間という短い間でしたが大変お世話になりました。グループホームでの仕事は入居者さんの意志と自由を尊重し、地域での生活をサポートするととてもやりがいのある仕事でした。入居者さんと一緒に行った買い物やカラオケなど楽しい思い出ばかりです。ぱれっとで学んだことを今後にも生かしていきたいです。ありがとうございました。(えびす・ぱれっとホーム 香取麻子)